

巻頭言

発刊に寄せて

中国「残留日本人孤児」を支援する兵庫の会・代表世話人
摂南大学特任教授 浅野慎一

中国「残留日本人孤児」を支援する兵庫の会・明石日本語教室は、明石市の委託事業として2012年に開設されました。本誌は、開設10周年の記念誌です。

10年間にわたり本教室を委託してくださった明石市役所、日々の活動を支えてくださった中国残留日本人・帰国者、そして市民各位に心より御礼申し上げます。また本教室の前身にあたる「明石交流会」の設立(2010年)以来、一貫して御協力をいただいていた神戸医療生活協同組合の皆様にも、深く感謝いたします。

さて、中国残留日本人とは、日本敗戦時(1945年)に中国に取り残され、日中国交正常化(1972年)以降まで日本への帰国を果たせなかった日本人です。日本敗戦時、13歳未満だった人を残留孤児、13歳以上だった人を残留婦人と呼びます。残留日本人の多くは1972年以降、家族とともに日本に永住帰国しました。永住帰国した残留日本人とその家族(配偶者・二世・二世の配偶者・三世など)を含め、中国帰国者といえます。

明石日本語教室は、こうした中国帰国者の皆さんを対象として、日本語学習、文化芸術・健康・生活等にかかわる各種交流事業を実施してきました。現在、62名の中国帰国者が学習者として登録し、33名のボランティア・スタッフとともに活動しています。

明石日本語教室の成り立ちや日々の活動を改めてふりかえると、いくつかの特徴が見て取れるように思います。

まず第1に、本教室は、中国残留日本人・帰国者自身の主体的な努力・取り組みによって誕生しました。日本政府は戦後、残留日本人の日本への帰国を厳しく制限して大幅に遅延させ、また帰国後も適切な自立支援を行いませんでした。そこで残留日本人は2002年以降、日本政府の責任を追及して、全国各地で国家賠償訴訟を提訴しました。そして2006年には神戸地方裁判所で勝訴し、それ以外の各地の裁判所も日本政府の政策・対応に多くの問題があったことを厳しく指摘しました。これを受け、2007年に支援法が改正され、新たな支援策が実施されました。明石日本語教室は、こうした新たな支援策の一環として開設されたものです。しかも本教室は、「ぜひ明石に日本語教室を!」という残留日本人・帰国者の熱烈な要望・訴えがきっかけとなって設置されました。まさに残留日本人・帰国者が自らの運動・行動によって「権利」として勝ち取った教室であり、居場所といえるでしょう。

第2に、本教室は、日本語学習・交流の場であることはもちろんですが、それだけにとどまらず、中国帰国者が直面するさまざまな社会的諸課題について考え、その解決をめざす一つの拠点でもあったように思われます。中国帰国者が抱える問題は、言葉の壁やそれに伴う社会的孤立だけではありません。仕事、医療、年金、介護、住宅、教育、人間関係、祭祀、日本と中国の往来など、生活のあらゆる領域で多くの固有の困難があります。明石日本語教室では、こうした中国帰国者のさまざまな悩み・困り事を共有し、その歴史・社会的背景についても学び、解決・改善につながる道を帰国者とともに模索してきました。本教室は、中国帰国者が多く居住する明石市とその周辺地域にしっかりと根を下ろし、中国帰国者が尊厳をもって生きていける地域社会・日本社会・国際社会の実現を目指してきたといえるでしょう。

第3に、本教室では、中国帰国者を単なる「救済の対象/日本語学習者」とみなさず、一人ひとりの尊敬すべき人間として向き合い、多くのことを学んできました。中国帰国者は、途方もなく苛酷な人生を、しかし苦難に負けず、たくましく前向きに生き抜いてきた人々です。それだけに、何げないあたりまえの日常生活の大切さを見逃さない、豊かで繊細な感性も持ちます。家族との離別という悲劇を乗り越えてきたからこそ、家族への情愛もとても深くこまやかです。戦争を二度と繰り返してはいけないという平和へ

の思い、不当な差別を許さない正義感、異文化を柔軟に受け入れる心のひろやかさ、そして国家の政治的思惑に左右されない民衆による日中友好への切実な願いなど、多くの大切な社会思想・価値観を、その苦難の人生をとおして身につけてこられました。明石日本語教室は、こうした中国帰国者の皆さんの人間性・思い・価値観の大切さに学び、共感する空間であったように思われます。

第4に、本教室は、ボランティア・スタッフにとっても大切な生きがい・喜び・成長の場でもありました。ボランティア・スタッフの経歴、参加動機、現在の思いは、実に多様で個性的です。そして本教室の活動において、そうした多様な個性がそれぞれ発揮され、かけがえのない「役割」を担っています。スタッフは中国帰国者との交流の中で、またスタッフどうしの関係において、多くのことを学び、楽しみ、ときには自らの生き方を問い直し、それぞれの人生を充実させてきました。明石日本語教室は、中国帰国者だけのものではありません。ボランティア・スタッフにとっても大切な居場所であり、多様な人々が集う共生社会のひとつです。

そして第5に、本教室は現在、中国帰国者二世問題について考え、その解決を目指す場にもなっています。一世の高齢化に伴い、教室の学習者には二世の比率が高くなってきました。一世が高齢化して、日本語教室・交流会への参加が難しくなっていることはそれ自体、大きな問題であり、こうした現実をふまえた新たな支援策の拡充が求められています。しかし同時に、二世もまたさまざまな困難に直面し、日本語教室・居場所を必要としているのです。しかもそうした二世の多くは現在、公的支援の対象外です。今後、公的支援対象である一世がさらに減少すると、現行支援法に基づく本教室の存続も困難になり、二世は日本語学習の機会や居場所を失ってしまいます。一世から二世へ、世代を越えて今なお続く深刻な中国帰国者問題の真の解決を目指し、本教室も微力を尽くしています。

以上のように、明石日本語教室は多様な側面を併せ持ち、多様な人々がそれぞれの役割を担うことで10年の道程を歩んで参りました。しかし同時に、そうした多様性の根底にある最も重要な土台は、中国帰国者とボランティア・スタッフが日々の活動の中で培ってきた同じ人間としての信頼と友情、そしてより良い社会の実現という願いではないでしょうか。これを共通の土台として明石日本語教室は、これからも歩み続ける所存です。

引き続き皆さんの御支援・御協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

